

1 文（文章）で解答する設問の答案については、次のA項の加点要素の合計から次のB項・C項の減点要素の合計を引いた得点をその設問の得点とします。ただし最低点は0点としマイナスの得点はつけません。

A

a 以下の採点基準では、模範解答をいくつかの要素に分割し加点要素とします。答案中にその加点要素に相当する部分があれば、その加点要素に配点された得点を与えます。

b ある加点要素は、その加点要素に配点された得点か0点で採点することを原則とします。たとえば5点配点された加点要素であれば5点か0点で採点することを原則とします。

ただし、その加点要素中の部分点を認める場合もあります。その場合それぞれの採点基準の中に明記されています。

c ある要素に加点するか否かが、他の要素と無関係に決まる場合と、他の要素との関係で決まる場合があります。前者の場合は、その要素を単独採点（独立採点）すると言いその旨必ず明記されています。後者の場合は、他の要素との関係について以下の採点基準で具体的に指示されています。

d **解答通り**という条件がある場合はいかなる部分点も認めません。

B

a 答案中に大きな誤読と判定される内容（語句）などがある場合は、その内容（語句）を減点要素として示されている場合もあります。

b 加点要素でも減点要素でもない部分もあります。その部分は加点も減点もしません。

C

次に該当するものは、答案の形式上の不備として、**一箇所につき1点の減点要素**とします。

a 誤字。漢字などの文字の明らかな誤りは誤字とします。

b 脱字。

c 文末の句点の脱落。

※字数指定のない場合、句点の脱落は誤字とし1点の減点とします。

d その他不適切と判断せざるをえない箇所。

e 不適切な文末処理。設問の問い方に対応していない形で答案の文末を結んでいない場合は、適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備による減点要素とします。

たとえば「…とはどういうことか？」という問いに体言で結んでいないものなどは適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備とします。

また、理由が問われているのに、「から」「ので」などで結んでいないものなども適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備と見ます。

※ただし、「ことである」などの表現も「こと」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。また、「からである。」などの表現も「から」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。また文末の表現を問わない場合もありますが、その場合はその都度明記されています。

2 日本語の表現として不適切なものは程度に応じて減点します。

3 次の各項に該当するものは、部分点の要素があっても、その設問の得点を0点とします。

a 答案が解答欄の欄外にはみ出しているもの。

b 一行の解答欄に二行以上書いた場合もその設問の得点を0点とします。

c 答案の文章が最後まで完結していないもの。

d 字数指定のある設問で、字数をオーバーしたもの。

e 字数指定のある設問で、制限字数の半分に満たない場合は「字数不足」と記し、全体×として、0点とします。この原則と異なる採点をする場合は、採点基準で指示します。

一 (評論) 採点基準 (合計 50点)

問一 各1点 (計5点)

- 1 綻
- 2 吟味
- 3 浮薄
- 4 尊崇
- 5 潰

※解答通り

A ○2点
確立しているはずの標準理論とされるものが疑われる状態になると、

B ○3点

それまで理論に従っていたにもかかわらず、突然、理論を否定する立場になったり、

C ○2点

疑われた状態が晴れると、

D ○3点

何事もなかったかのようにその理論に忠実であるようになったりするから。

※A・B・C・Dに関して部分採点

A 「確立しているはずの標準理論とされるものが疑われる状態になると」(2点)

※「日和見主義」の一方(確立しているはずの理論が疑わしい状況になること)の説明。

△「理論が疑われると」は、「確立しているはずの標準理論」であることについて触れていないので▲1点減点で△1点。

B 「それまで理論に従っていたにもかかわらず、突然、理論を否定する立場になったり」(3点)

※「日和見主義」の一方(従っていた理論を否定すること)の説明。

△「理論を否定したり」は、「それまで理論に従っていたこと」について触れていないので▲1点減点で△2点。

△「くると態度を変えて革命家に変身したり」は、「それまで理論に従っていたこと」について触れていないことと、本文の比喩的表現を一般化していないことから▲2点減点で△1点。

C 「疑われた状態が晴れると」(2点)

※「日和見主義」の一方(疑われた理論の疑いが晴れること)の説明。

○「理論が正しいとわかると」も可。

○「新しい理論が否定されると」も可。(Aの観点で「標準理論」を否定する「新理論」があることが前提)
△「ガセネタとわかると」は、本文の俗語を一般化していないので▲1点減点で△1点。

D 「何事もなかったかのようにその理論に忠実であるようになったりするから」(3点)

※「日和見主義」の一方(元の理論に忠実であること)の説明。

○「何事もないうちに元の理論を肯定するから」も可。

△「その理論に忠実であるうとするから」は、「何事もなかったかのように」について触れていないので▲1点減点で△1点。

△「保守派に戻るから」は、「何事もなかったかのように」について触れていないことと、本文の比喩的表現を一般化していないことから▲2点減点で△1点。

A ○2点
宇宙論が科学者の中で一般化してくると、

B ○2点
それまでの定説が覆されるような新説が出てくるが、

C ○4点
それは多くの場合、新説を発表した科学者自身の過大解釈や錯覚や想像力の不足などによる誤認であるが、

D ○4点
それはあたかも、神が、誤認を犯す人間などには計り知れない領域があることを知らしめているかのようなものであるということ。

※A・B・C・Dに関して部分採点

A 「宇宙論が科学者の中で一般化してくると」(2点)

※「傲慢になりがちな科学者」が出てくることの前提の説明。

○「かつては限定された科学者のみが宇宙論を扱っていたが、その後多くの科学者がそこに参入するようになった」も可。

△「人工衛星の発達で宇宙論の研究者が増えてくると」は、本文の説明の一部分だけの指摘であるので▲1点減点で△1点。

B 「それまでの定説が覆されるような新説が出てくるが」(2点)

※「傲慢になりがちな科学者」が出てきた結果として生じた事態の説明。

△「それまでの定説を覆そうとして新説が発表されるが」は、そのようなことは本文に示されていないので▲1点減点で△1点。

C 「それは多くの場合、新説を発表した科学者自身の過大解釈や錯覚や想像力の不足などによる誤認であるが」(4点)

※「傲慢になりがちな科学者」が犯す失敗の説明。

△「そうした新説は見落としによるものであるが」は、本文の説明の一部分だけの指摘であるので▲1点減点で△3点。

△「それは科学者の早とちりであるが」は、本文の説明の内容に触れていないので▲1点減点で△3点。

D 「それはあたかも、神が、誤認を犯す人間などには計り知れない領域があることを知らしめているかのようなものである」ということ(4点)

※「老獪な神のたしなめ」の説明。

△「その間違いを神が分からせようとする」は、「間違いを」ということは本文に示されていないので▲1点減点で△3点。

×「神が人間の説く理論と矛盾するような現象を創出している」は、「もともとの理論」にも「事実の誤認をして示される理論」にも一致しないので×0点。

A ○2点

「アインシュタインは宇宙の記述する際に根拠が不明な「宇宙項」なるものをつけ加えてしまったが、

B ○4点

それは彼が神を尊崇するがゆえのことであるので、神に忠実であると言え、

C ○2点

フリードマンはアインシュタインの「宇宙項」を排除して宇宙についての記述をしたが、

D ○4点

宇宙は神が創造したと考えるならば、フリードマンもまた、神に忠実であると言え、

E ○2点

どちらが真に神に忠実であるとは明確にできないから。

※A・B・C・D・Eに関して部分採点

A 「アインシュタインは宇宙の記述する際に根拠が不明な「宇宙項」なるものをつけ加えてしまっ
たが、」(2点)

※アインシュタインの宇宙の記述についての説明。

B 「それは彼が神を尊崇するがゆえのことであるので、神に忠実であると言え」(4点)

※アインシュタインがなぜ「神に忠実」であるかの説明。

C 「フリードマンはアインシュタインの「宇宙項」を排除して宇宙についての記述をしたが」(2点)

※フリードマンの宇宙の記述についての説明。

D 「宇宙は神が創造したと考えるならば、フリードマンもまた、神に忠実であると言え」(4点)

※フリードマンがなぜ「神に忠実」であると考えられるのかの説明。

× 「その点(Cの内容)でフリードマンは神に忠実だった」は、宇宙と神の関係について触れていないので
×0点。

E 「どちらが真に神に忠実であるとは明確にできないから」(2点)

※両者について、本文の記述が「〜か」という疑問の形になっていることについての説明。

○ 「両者ともに神に忠実であると言えるから」も可。

× 「アインシュタインの方が神に忠実であったから」は、本文の記述に反するので×0点。

A ○3点

高い才能を持つ科学者が、ある事象について他に先行して説き明かしたとして、後にそれが誤ったものであったとしても、

B ○3点

後続する科学者たちは誤った部分を修正できずすれば、

C ○3点

その時点で修正をした科学者の成果になる」ともあると「い」と。

※A・B・Cに関して部分採点

A 「高い才能を持つ科学者が、ある事象について他に先行して説き明かしたとして、後にそれが誤ったものであったとしても」(3点)

※「天才の失敗」を一般化しての説明。

△「アインシュタインの失敗は」は、アインシュタインの具体的な話題にとどまって、一般化できていないので▲1点減点で△2点。

B 「後続する科学者たちは誤った部分を修正できさえすれば」(3点)

※「凡才」を一般化しての説明。

×「アインシュタインの宇宙論が中心となっているので」は、一部のことでない説明になっているので×0点。

C 「その時点で修正をした科学者の成果になる」ともあると「い」と」(3点)

※「飯の種」を一般化した説明。

△「後の科学者の成果となる」は、必ずそうなることを説明していて、傍線部「〜と言えないでもない」のニュアンスが示されていないので▲1点減点で△2点。

×「後の研究者の新たな発見の糧となる」は、「新たな発見」が間違っているので×0点。

×「後の研究者たちの宇宙論の議論を活発化させる」は、「飯の種」を言い換えているわけではないので×0点。

問一 10点

A 4点

B 1点

(模範解答例) 時代精神の把握とは、それを実践する人間の行為の結果であり、行為主体である個人は

C 5点

何らかの歪みを含んだ固有の精神としての個性をもってそれを実践するから。

★ 「時代精神」というものは、個性を持つ人間によって把握されるが故に、それは常に一つの歪みを持ったものとなる」という内容が明快に読み取りうる答案となっているか否かをしっかりと吟味する。

A 「血肉化した時代の姿」の説明。

1 「時代精神」は「時代の姿」のままでも許容する。

2 「把握しようとする」は「理解しようとする」「見て取ろうとする」「つかもうとする」などでも可。

3 「それを実践する人間の行為」の箇所は「実践」または「行為」という語のいずれかが使われていればよしとする。

4 「時代の姿」「時代の精神」という語だけ示されている場合は1点だけ与える。

B 「時代精神」を把握する主体が「個人」「個人々々」「一人一人の人間」「二人一人の人間」など可であることが、明確な主語の形を取っていないことも、答案中に何らかの形で示されていなければよい。採点はAやCに含める形で加算すればよい。

C 本文中の「一個人の固有の精神の鏡」「鏡の歪み」「歪みは各人固有の癖をもっており、私たちが個性と呼ぶのはその癖のことである」といった説明をまとめたもの。人間の「個性」は、その人間に「固有の癖」であり、「歪み」を持つているということが、ほぼ説明し尽くされているなら5点与えてよい。およその基準は次に示す通り。

1 「固有の精神」または「個性」のいずれかがあれば2点

2 「歪み」が説明されていれば2点。「癖」を「癖」としている場合は1点。

3 「固有の精神」「個性」「歪み」の全てが説明されておれば5点。

* 「〜から・ので・ため」あるいは「〜という理由による」など、理由説明の答案の形になっていないものはマイナス1点。

A 3点

B 2点

C 2点

(模範解答例) 批評家は、芸術家のように 作品創造のためではなく、既成の作品を解析し理解するために
D 1点 のみ知性を發揮するということ。

★ 知性の役割について、芸術家と批評家の対比が的確に説明されているか否かをしっかりと吟味する。

A 答案全体として「芸術(家)」と「批評(家)」との対比が説明されていると判断できれば3点与える。

B チボオデの引用文の「芸術家のように、知性を創造に役立てる」という箇所に対応するもの。同内容であれば2点与える。

C 「批評家」がどのように「知性」を使うかについての説明。

1 「解析」という語はなくても「理解」という語さえあればよい。

2 チボオデは「批評は、創造を知性に役立てる」と言っている。これをそのまま使った答案にも1点与える。チボオデがここで言う「創造」とは、芸術家によって創造された作品という意味である。

D 「知性」という語があれば1点与える。

A 3点

B 2点

(模範解答例) 江藤淳が提示した小林秀雄像に対して、筆者が新しい見解を何も示せないまま、その模倣に

C 3点

終わってしまったということ。

★ 「屋上屋を架す」という諺の意味の理解が正しくなされているかをまず吟味する。「必要のない(しても無駄な)ことを重ねてする」と同等のニュアンスが読み取れればよい。

A 何に対して「屋上屋を架す」のかを示したもの。ほぼ同等の説明と見なせれば3点与えてよい。「小林秀雄像」に相当する説明がなく、単に「江藤淳」「江藤氏」などとしている場合は1点とする。

B 「屋上」に「架す」「屋」に関する説明。解答例は「示せない」という否定的な説明になっているが、例えば「全く同等の見解を繰り返して」といった肯定表現の説明でもかまわない。

C 「屋上屋を架す」という諺自体が含む意味を明確化した説明。「模倣」は「亜流」などでもよいし、それに相当する説明的な言い方になっていても許容する。但し「同じような小林秀雄像を示してしまう」というような具体的な説明の場合には2点とする。

A 3点

B 3点

(模範解答例) 批評とは、批評対象を解析しながら、同時に情熱をもって自分自身の夢を語る行為であり、

C 4点

かつその自身の夢に対しても常に懐疑的な視線を向けているから。

★ A・Bは『様々な意匠』の「繊鋭な解析と潑刺たる感受性の運動」に対応し、さらにその後半の「潑刺たる感受性の運動」を「情熱を持って自分自身の夢を語る」と説明したもの。Cは傍線部の「批評の対象が己れである」についての説明である「批評とは竟に己れの夢を懐疑的に語る事」に対応している。

A 一般的な批評行為についての説明。対象となる芸術作品に対する知性的な営為を述べたものである。「解析」は「分析」や「研究」「読み解き」といった言い方でも差し支えない。同等の内容と認められるなら3点与える。

B 『様々な意匠』の「感受性の運動」の説明である。より適切に説明すれば「作品に触発された批評家自身の自意識について語る」ということになる。その「自意識」とは、『様々な意匠』の中の「情熱の形式をとつた彼(＝批評家)の夢」であるから解答例のような説明になる。「自分の夢を語る」「己れの自意識を表出する」など、「感受性の運動」の説明となっていると判断できる答案には3点与える。

C 批評家が自分自身をも批評の対象とするということについての説明。傍線部直後の「己の夢を懐疑的に語る」から、批評家は自分自身の夢(＝感受性・自意識)を懐疑する、すなわち、それをも批評の対象とするということを読み取り、それが答案に的確に示されているか否かを吟味する。

* 「己の夢を懐疑的に語る」をそのまま答案に使っている場合、B・Cをまとめたかのようにも見えるけれど、その場合には、Cの4点のみ与える。

* これも理由説明の形になっていない場合はマイナス1点。

A 3点

B 2点

(模範解答例) 批評と創造は「一つのものだと言うのを小林秀雄にためらわせたのは、批評家である以前に」

C 4点

D 3点

自分が自分として存在していることの意味自体を問い続けることによって、自分の夢の表現

E 2点

とも距離を置かざるをえなかったからであろうということ。

★ B・Cは、小林秀雄が解こうとした「謎」についての説明。Dは小林秀雄の批評が「創造行為そのものと融和」できなかったということの説明。

A 「彼を押しとどめたの」についての具体的説明。小林秀雄に何をさせなかったのが説明できておればよい。「ためらわせた」は無くてもよい。例えば「批評と想像は一つのものだと小林秀雄が言えなかったのは」でも可。

B これは本文の「然し彼は彼以外のものにはなれなかった」から導き出された説明。「人間が何者かになる以前に」という意味が示されていればよい。

C 本文の「しかし彼以外のものにはなれなかった。まさしくこれは『驚く可き事実』であるが、この驚くべき事実は何故という問いを、或いは如何にしてという問いを発する」の「問い」についての説明である。もちろんBとセットになるものである。

D ★にも示した通り、小林秀雄が自分の批評行為を創造と融和させられなかったということの中身を説明したものである。本文の表現を利用して「作家のように自己の夢によって生きることができなかった」といった説明でも可。

E 傍線部に「おそらく」とあるので、傍線部が筆者の推測であることを答案に示したものである。傍線部が筆者の推測であるということが答案から読み取れば、2点与えてよい。

◆各設問共通

▲内容説明の設問では、末尾の句点がないものは▲1点減点。ただし、現代語訳の設問では、句読点は不問。

問一 10点

(模範解答)

A ○2点

B ○5点

女は、大和の国に三か月ほど滞在しているうちに、心寂しいと感じて、

C ○3点

寺めぐりをしようと思いついて、大和の寺々を巡っていたところ、 (10点)

◆各加点要素の加点の条件【A・B・Cに関して部分採点】※ことばを補いつつ現代語訳する問題

A 「女は、大和の国に三か月ほど滞在しているうちに」(2点)

※「大和に三月ばかりすむに」の訳

×「女は」という主体が抜けている場合、A×0点。

○「女は」は、「伊勢は」でも○。

×「女は」は、「私は」など、一人称にしているものは不可×。

×「三月ばかりすむに」の「すむ」をそのまま「住む」(Ⅱ「居住」の意)としているものは不可×。ある期間

留まっていることを表す表現であること。「逗留」「留まって」などは可○。

B 「心寂しいと感じて」(5点)

※「さうぢゆうしとて」の訳

○「心寂しいと感じて」、「・」「満ち足りなさを感じて」、「・」「素漠とした思いにかられて」、「等々、ここの」「さうぢゆうし」の意味が理解できていること。

C 「寺めぐりをしようと思いついて、大和の寺々を巡っていたところ」(3点)

※「寺めぐりせむと思ひて、ありきけるに」の訳

○「(大和の)寺々を巡っていたところ」、「・」「(大和の)寺詣りを続けていた時に」、「・」「(大和の)巡礼をしていたところ」、「(大和の)寺巡りをしていた時に」、「(大和の)寺々を歩き回っていたところ」、「等々、ここの」「ありく」の意味が理解できればよい。

▲巡る寺は、「大和の寺」であることが示されていない場合、▲1点減点。ただし、Aの部分で、現在、滞在している場所として、「大和」に居ることが書かれて入れば、可。

(模範解答)

A①○1点 A②○1点 A③○1点

(女の) 従者たちが、橋の袂で 呆然としていた女を

A④○1点

「雨が降るかもしれない」と急ぎ立て、(龍門寺へ)と急ぎ、

B①○1点 B②○1点

龍門寺へなんとかたどり着くと、

C①○1点 C②○1点

(龍門寺の) 僧たちが「雨ではなく雪だろう」と話していたのだが、

D①○1点

D②○1点

そのうちに雪が激しく降ってきた ということ。

◆各加点要素の加点の条件

【A・B・C・Dの各要素に関して部分採点】

A「(女の) 従者たちが、橋の袂で呆然としていた女を「雨が降るかもしれない」と急ぎ立て、(龍門寺へ)と急ぎ、」
(4点)

①「(女の) 従者たちが」(1点)

○「女」は「伊勢」も可○。「女」は記載がなくても可。

○「従者」は「お供」「侍女」でも可。

×「従者」を、「供にいた人」のように上下関係のない友達のような表現・たまたま居合わせた人のような表現にとれるものは不可×。

×「従者」という主体が書かれていても、解答の他の要素が全く違っている場合は得点できない×0点。

②「橋の袂で」(1点)

×「橋の下」「橋のふもと」は不可×。

○「橋のそば」「橋のきわ」は○。

③「呆然としていた女を」(1点)

○「女」は「伊勢」「作者」でも可。

○「呆然としていた」のが、「女」であることが、答案からわかれば(どこかに記載があれば)よい。

④「雨が降るかもしれない」と急ぎ立て、(龍門寺へ)と急ぎ」(1点)

×「雨が降るかもしれない」という理由と、その結果として、「女を急ぎ立て、急いで(龍門寺に)向かった」という2点があることが必要。どちらか一方しか記載がないものは不可×。

×「雨が降るかもしれない」と考えたのは「従者」。他の人物が考えていた場合は×0点。

B 「龍門寺へなんとかたどり着くと」(2点)

① 「龍門寺へ」(1点)

○ 「龍門寺」は単に「寺」でも可○。

② 「たどり着くと」(1点)

○ 「たどり着く」は「駆け込む」などでも可。寺に着いたことがわかる表現であれば構わない。

C 「龍門寺の(僧たちが「雨ではなく雪だろう」などと話していたのだが、」(2点)

① 「龍門寺の(僧たち」(1点)

○ 「僧」は「法師」などでも可○。

× 「僧」という主体が書かれていても、解答の他の要素が全く違っている場合は得点できない×0点。

② 「『雨ではなく雪だろう』などと話していた」(1点)

○ 「話していた」は「言っていた」などでも○。

× 「雨でなく雪が降るだろう」と考えたのは「僧たち」。他の人物が考えていた場合は×0点。

D 「そのうちに雪が激しく降ってきた」ということ。」(2点)

① 「雪が激しく降ってきた」(1点)

× 「激しく降る」は、「たくさん降る」は不可×。

× 単に「雪が降ってきた」のように、「かきくらす」のニュアンスが含まれないものは不可×。

② 「とどろくこと。」(1点)

○ 「どろろいうことか」という問いを受ける形になっていれば○。

× これだけでは得点できない。他に○の部分があり、適切につながっている場合のみ加点。

(模範解答)

A ①○1点 A ②○1点 A ③○3点

私は、大和の寺々を見届けることもできず、

B ①○2点

B ②○3点

また仙の岩屋に住む仙人たちのように鶴に乗り、空に消え去ってしまうこともなくて、

◆各加点要素の加点の条件

【A・Bの各要素に関して部分採点】※「ことばを補いつつ現代語訳する問題」

A 「私は、大和の寺々を見届けることもできず、」 (5点)

※「見もはてで」の訳

①「私は」(1点)

○「私」は「自分」も可○。一人称の主体が補われていれば○。

②「大和の寺々を」(1点)

○「大和の寺たちを」「多くの大和の寺を」なども可○。「大和」にある複数の寺というニュアンスが出ていれば可○。

×「寺を」「龍門寺を」などは前記の条件を満たしていないので不可×。

○「大和の寺を」とあっても、A ③等の表現で、複数の寺を指していることが読み取れば、可○。

③「見届けることもできず」(1点)

○寺々を「見届けることもできず」「見終わることもできないで」等の意味が表現できていれば可○。

B 「仙の岩屋に住む仙人たちのように鶴に乗り、空に消え去ってしまうこともなくて、」 (5点)

※「そらに消えなで」の訳

①「仙の岩屋に住む仙人たちのように鶴に乗り」(2点)

○「(仙の岩屋に住む)仙人たちのように鶴に乗り」等、典拠となっている「仙の岩屋伝説」を引用できているのであれば可○。したがって、単に「鶴に乗って」のような表現でも可○とする。

②「空に消え去ってしまうこともなくて」(3点)

○「空に消え去ってしまうこともなくて」「空に消えてしまわないで」等、完了の「ぬ」(てしまう)、打消の「で」(ない)等が正確に現代語訳できている、初めて○となる。

×「空に消えられないで」「空に消えないで」のように完了「ぬ」が訳されていない、「空に消えてしまって」のように打消「で」が訳されていないものは不可×。

(模範解答)

B

雲の中から落ちて来るような龍門の滝の光景を、まるで

A ○5点

山を守る女神が、仙人が着ていたという無縫の衣を作るための巨大な布を、この滝の水に曝している

B ○5点

かのようにだと、比喩的に描写している表現。

◆各加点要素の加点の条件

【A・Bの各要素に関して部分採点】

A 「山を守る女神が、仙人が着ていたという無縫の衣を作るための巨大な布を、この滝の水に曝している」 (5点)

○ 「①山の女神(山姫)が、②巨大な布を、③水(滝)に曝している」という3点がそろっていれば可○。

B 「まるで…のようにだと、比喩的に描写している表現。」 (5点)

○ 「比喩的に描写している表現。」 「あたかも…ようだとしている表現。」 「まるで…のようだとする表現。」

「…に喩えている表現。」 のように、比喩であることが読み取れれば可○。

○ 比喩表現のかわりに「…という幻想的な表現。」 「…とする空想的な表現。」 という書き方も可○。

× Aに点数がなくても加点できるが、Aが全く違う要素になっている場合は、これだけでは加点できない。

※文末が「…比喩的に表現している。」 「…幻想的に描写する点(ところ)。」 など可○。

(模範解答)

A ○3点

B ○3点

C ①3点

C ②1点

伊勢は、自分を捨てた男のいる都に帰らねばならない、道真は、辞めたくても宮仕えを辞することはできない、
両者とも結局は厭わしい現実の日常を捨てることはできない事実を 再認識した点。

◆各加点要素の加点の条件

【A・B・Cの各要素に関して部分採点】

A 「伊勢は、自分を捨てた男のいる都に帰らねばならない」 (3点)

※伊勢の状況の説明

○ 「伊勢は都に帰らねばならない」という表現があれば可○。

△ 「伊勢」という主体のヌケは▲1点減点で、△2点

B 「道真は、辞めたくても宮仕えを辞することはできない」 (3点)

※道真の状況の説明

○ 「道真は宮仕えを辞することができない」という表現があれば可○。

△ 「道真」という主体のヌケは▲1点減点で、△2点。

C 「両者とも結局は厭わしい現実の日常を捨てることはできない事実を再認識した点。」 (4点)

※伊勢と道真の共通の心情

① 「結局は厭わしい現実の日常を捨てることはできない事実を」 (3点)

○ (両者にとってマイナスの) 「現実を捨てることができない」「現実から逃れられない」「日常に戻らねばならない」「現実の世界に帰るしかない」などの表現があれば可○。

② 「再認識した」 (1点)

※C①の内容に「気付いた・理解した・再認識・直面」したという内容であればよい。

×C①に加点が無い場合は、単独で得点はできない。

○文末が「…こと。」「…心情。」のようになっているものも可○。